石川達夫(編)
『ロシア・東欧の抵抗精神——抑圧・弾圧の中での言葉と文化』

（成文社、2023年）

2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻は、世界を震撼させた。東西冷戦の終結とソ連の崩壊から30年以上も経った21世紀の今になって、ヨーロッパでこのような露骨な侵略戦争と無法な蛮行が行われるとは。しかも、国連の安全保障理事会の常任理事国であり、世界一多くの核弾頭を保有する核大国ロシアによって……。戦争の行方は未だ見通せず、最悪の場合には核戦争に至る可能性もある。いずれにせよ、世界の現在と未来に暗雲を広げる大事件である。日本から見ると遠い「他国事」のように見えるかもしれないが、ロシアから見たらウクライナも日本も同じ隣国だ。日本にとっても決して「他国事」ではない。我々には一体何ができるのか?

2022年10月に専修大学で開催されることになっていた日本ロシア文学会全国大会の実行委員長を務めていた筆者は、同時にプレシンポジウムの組織者でもあったが、2月の戦争勃発を受けてすぐに、このプレシンポジウムのテーマを「ロシア・東欧の抵抗精神——抑圧・弾圧の中での言葉と文化：ロシア、ベラルーシ、ウクライナ、ポーランド、チェコ」として、日本ロシア文学会と日本スラヴ学研究会の合同公開シンポジウムにすることとした。そして10月21日に神田キャンパス10号館相馬永胤記念ホールでシンポジウムを開催し、YouTubeによる同時配信も行った。本書は、このシンポジウムを文書化して改訂し、更に幾つかの論考を加えたものである。筆者はともかく、執筆者たちは第一線で活躍するロシア・東欧文学・文化研究者たちであり、章立ては以下の通りである。

「まえがき　干からびた荒れ地に言葉の滴(しずく)を　石川達夫」、「序　国歌は何を示唆するか?　石川達夫」、［ロシア］「第1章　ロシア国民文学と帝国的一体性の神話——近代ロシアにおける文学的抵抗とその逆説　貝澤哉」、「第2章　荒野に自由の種を蒔く——『ソヴィエト的人民』と作家たち　前田和泉」、［ベラルーシ］「第3章　銃殺された文学——1920年代の若手文学グループ『マラドニャーク』と現代作家サーシャ・フィリペンコをつなぐ歴史　奈倉有里」、［ウクライナ］「第4章　銃殺された文芸復興——1930年代の文学グループ弾圧と、現代にいたる言語と民族の問題　奈倉有里」、［ポーランド］「第5章　ポーランド人であること、になること、にさせられること——ニーチェからゴンブローヴィチへ　西成彦」、［チェコ］「第6章　チェコ抵抗精神の系譜——ヴァーツラフとヤン　石川達夫」、「あとがき　抵抗の歌と花　奈倉有里」

内容は多岐にわたり、ここで詳しく紹介する紙幅はないが、奈倉が「あとがき」で次のように述べているのは、本書の性格を示すのに言い得て妙だと言えよう。「抵抗の歴史は、過去からの声であり、命をかけてその声をあげた人々が私たちに遺した財産であり、いままさに弾圧のもとにある人々の精神の糧であり、未来への手がかりでもあるのだろう」。